令和５年度卒業式　学長式辞

卒業生、修了生のみなさん、あなたがたは本学の各学部・大学院研究科が定める学位授与の方針を踏まえた厳格な審査を経て、今日、ここに学士、修士または博士の学位を授与されました。ここに至るまでの着実な研鑽に敬意を表し、この式典にご臨席を賜りました関係者のみなさまとともに、心よりお祝いを申し上げます。

このたび学士課程を終えたみなさんの多くが本学に入学されたのは、2020 年４月。それは、改めて申すまでもなく、新型コロナウィルス感染症がまさに世界的に拡大しつつある時期でした。本学を含む多くの大学で入学式が取りやめとなり、式典もないままに入学したかと思うと、４月７日には東京、大阪、福岡など７都府県に緊急事態宣言が発出され、９日後の４月 16 日にはその対象地域が全国に拡大。その後、幾度かの「感染爆発」を経て、昨年（2023 年）５月に新型コロナが感染症法上の５類感染症に移行するまで、みなさんは制約の多い学生生活を強いられました。４年間の在学期間のうち３年余りをパンデミック下で過ごしてきたわけです。

本学は、コロナ下においても「対面授業重視」の方針を掲げ、感染対策を講じながら、可能な限り対面での授業の実施に努め、感染状況に応じて、柔軟に遠隔授業に切り替えるというやりかたで、教育活動を継続し、単位の認定と学位の授与を途切れなく行なうことができました。この未曽有の危機は、教職員の力だけでは到底乗り越えることはできませんでした。学生のみなさんの協力と忍耐があったからこそ、可能になったことだと思います。心からお礼を申し上げます。

何しろ、多くの教員にとって、たとえばオンライン会議システムを使って遠隔授業を行なうことすらも初めての経験でした。振り返ってみると、私自身も、最初のころは、勝手もわからず、今では考えられないような失敗を再三にわたって仕出かしていたことが思い出されます。それにも関わらず、学生のみなさんから否定的な意見や苦情を聞いた記憶はまったくと言ってよいほどありません。む

しろ、授業アンケートには「こんな大変な時期にオンラインで授業をしてくださって、ありがとうございます」といった労いの言葉が数多く書き込まれていました。また、授業中、私の説明の不備に気がついた学生が、それを補う内容のチャットをさりげなく全員宛てに送ってくれたこともありました。大学というコミュニティが、これまで経験したことがない異常な事態を前にして、教員、事務職員、学生といった立場の違いを超えて協力しあうことができたからこそ、パンデミック下で学んだみなさんの多くがこうして所定の課程を修め、学位記（卒業・修了証書）を手にすることができたのだと感慨を新たにしているところです。

コロナ下においては、これまで当たり前に行っていたことが当たり前にできなくなり、オンライン授業やリモートワークなど新しい学びや仕事の様式が導入されることで、社会を構成する幅広い人たちが自身の生きかたや働きかたを見つめ直すという動きが見られました。今日、キャンパスから社会へと巣立つみなさんの顔を見ながら、そんな動きについて思い出しています。たとえば「静かな退職（quiet quitting)」です。「静かな退職」とは、実際に勤めている会社や役場を退職するわけではないのですが、クビにならない程度の必要最低限の仕事をこなす働き方のこと。昇給や昇進を目指してバリバリ働くのではなく、退職が決まった従業員のような余裕をもった精神状態で働くことを指しているようです。TikTok に投稿された 20 秒にも満たない一本の動画から急速に拡散した概念です。

私がこの言葉を初めて目にしたのは、2022 年 8 月 6 日付の英紙「ガーディアン（*The Guardian*)」（オンライン版）に掲載された記事でした。その見出しは「静かな退職――必要最小限しか働かないことが地球規模に拡がったのはなぜか？」。そして記事本文の書き出しは「バートルビーが帰ってきた。きっと彼自身は、できればそうしたくないと言っているだろうが(Bartleby is back, although no doubt he would prefer not to be)」というものでした。

バートルビーというのは、19 世紀アメリカの作家、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-

1891）の短編小説「書記バートルビー――ウォール街の物語（Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall Street)」（1853）の主人公で、ニューヨークの法律事務所に勤めるスクリブナーです。「スクリブナー」というのは、「書記」とか「書写人」と訳されますが、要するに書類作成係で、ワープロもコピー機もなかった時代の法律事務所では、契約書や裁判関係の文書の写しを指示通りに手書きで作成するスクリブナーが何人も働いていたのです。

バートルビーは事務所に入った当初は、熱心に仕事をしていましたが、ある日、所長が、書き写した書類の読み合わせの手伝いを指示すると、「できればしないで済ませたく存じます（I would prefer not to)」と言って拒否します。これは、丁寧な表現ではあるですが、いかにも取り付く島もないといった印象を与える拒絶の言葉です。記事にあった「きっと彼自身は、できればそうしたくないと言っているだろうが」というのは、このバートルビー自身の言葉を踏まえているわけです。そのうちに、本来の業務である書類作成を指示しても、「できればしないで済ませたく存じます」の一点張りで、ただ窓から見える壁を眺めていること以外、何もしなくなってしまうのです。もちろん事務所はクビになりますが、バートルビーは毎日、事務所に居座って、窓から壁を眺めています。結局、これを持て余した所長は事務所を移転してしまうのですが、それでもバートルビーは毎日、事務所があった部屋に「出勤」し続け、ついには刑務所に収容されてしまいます。刑務所は、この小説の中で「墓場（Tombs)」という俗称で呼ばれているのですが、この「墓場」で、バートルビーは食事をすることすらも拒否して死んでしまうというのが小説の結末です。

とても謎めいた小説で、単純な教訓や「作者の言いたいこと」を読み取ることが難しいものですから、今日に至るまで、その評価や解釈について、批評家や研究者の間でも議論が絶えません。ただ、激しい競争と淘汰を生き抜くために人もモノもマネーも絶えず動き回っている都市空間のなかでただ一人、その理由をまったく説明しないまま一切の活動を拒否して、事務所の窓の外の壁を見つめている主人公の姿は非常に印象的で、いわばひとつの心象風景として読者の記憶に残ります。しかし、この小説をいくら丁寧に読んでも、バートルビーが働かないことの理由はまったくわからない。

もしかしたら、主人公が働かない理由が永遠に解決不能な謎として設られていること自体の中に、実は作品理解の鍵があるのかもしれません。読者は、その謎を突きつけられ、思いを巡らす過程で、「では私は、なぜ働いているのか？」、「なぜ生きているのか？」という根源的な謎を見つめ直さざるを得なくなるからです。

コロナ下においては、社会基盤を維持する上で絶対に不可欠な仕事に従事する人たちを「エッセンシャル・ワーカー」あるいは「フロントライン・ワーカー」と呼び、その仕事に対して敬意を払おうという、当然の動きがありました。その一方で、「不要不急」と烙印を押された仕事が半強制的に休止に追い込まれ、その仕事に就いていた人たちは差し当たり、本人の意思に関わらず「窓の外の壁を見ている」しかなくなるという状況も生み出したのです。「コロナの時代」は、本人たちも望まないうちに数多くのバートルビーが生み出された、不条理な時代であったと言えるかもしれません。

「ガーディアン」紙の記事は、コロナ下における生活や労働のスタイルの変化に伴って、勤労者の間に、生活のため、お金のためだけに働くというだけでは満足できないという感覚が静かに拡がっていることに注目しています。さらに、コロナ下で死を差し迫った自分ごととして感じるという、ある意味で存在論的な不安の感覚があり、さらには社会全体で、個々の労働の公共的価値が見直されるようになった。その結果、多くの人々がふと立ち止まって「私の仕事は、私にとってどのような意味を持つのか？」、「自分の価値観に適うような役割を私がこの社会で果たすためにはどうすればいいのか？」と思いを巡らし、結果として「大退職時代（Great Resignation)」と呼ばれる未曽有の労働力の大移動が起こるだろうという予測を紹介しています。コロナという極端な危機の時代に、広く勤労者のあいだに、働くことの意味を、自身の責任で主体的に発見していこうという志向が強まってきたというのは、今から振り返っても、よく理解できます。

今日の、特にホワイトカラーの仕事の多く（しかも比較的高い給料が払われる仕事の多く）が、働く人自身にとってさえ、まったく無意味かつ不必要としか思えず、むしろ有害ですらあると感じられ

るようなものによって占められつつあるということについては、実はコロナ禍以前から、警鐘が鳴らされていました。パンデミック下の2020年9月に急逝したイギリスの文化人類学者デヴィッド・グレーバー（David Graeber）が2019年に上梓した『ブルシット・ジョブ――クソどうでもいい仕事の理論（*Bullshit Jobs: A Theory*）』（日本語版は2020年、岩波書店刊）です。グレーバーの直感と洞察が指し示した社会矛盾は、コロナ禍のもとで「静かな退職」、「大退職時代」という社会的なムーブメントを生み出し、コロナ後の今日も、その運動の余波はこの社会にさらに広範囲に、かつ深く浸透しつつあると言えそうです。

さて、みなさんはこれから社会に出て、さまざまな場で働きはじめます。その時、仕事のやりがい、すなわち職業人としての生きがいというものは、どこから生まれてくるものでしょうか？　より多額の給料がもらえればやりがいを感じるでしょうか？　働くことで感謝されたり、評価されたりすることでやりがいを感じるでしょうか？　あるいは、していて楽しいと思えるような仕事だとやりがいを感じるでしょうか？　ちょっと前までは、そんなことは考えることもなく、漫然と働き、漫然と生きてきた人でも、コロナ禍を経て、ふと立ち止まって考えこんでしまうという時代になっているようです。

コロナの時期にこの大学で悩み苦しみながら学んだみなさんは、ここで培った能力と見識を十分に活用して、それぞれの持ち場で、借り物ではない、自分にとっての仕事の意味を、「働きがい」を、追求してくださるだろうと期待しています。みなさんの人生が、職業人としても、家庭人としても、ひとりの人間としても、幸せなものになることを心より祈念し、この式辞の締めくくりにしたいと思います。ご卒業おめでとう。どうかお元気で。

令和6年3月19日　　鹿児島国際大学学長　　小林 潤司